日本基督教団　梅ヶ丘教会会報

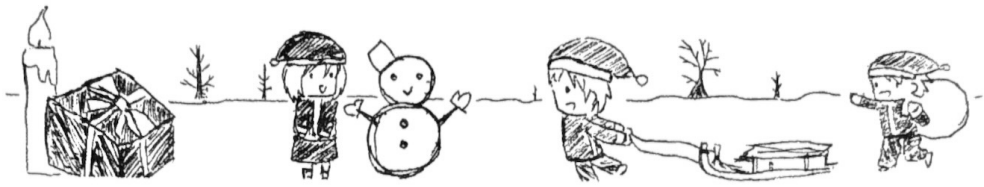
ぶどうの木



発行人　牧師　広田叔弘
企画編集　広報委員会
www.church.ne.jp/umegaoka/
2026年11月22日発行

〒155-0033
東京都世田谷区代田3-37-7
TEL：03-3414-5772
FAX：03-3414-5778

第281号　2026年12月号



『待ちつつ、急ぎつつ』

牧師　広田叔弘

そして、わたしが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。
テサロニケへの手紙一　4章11節

しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。
ローマの信徒への手紙　15章23～24節

アドベントは、ラテン語のアドベントゥス「到来」から来たもので、「キリストの到来」を意味します。既に世に来たキリストを迎える準備をすると共に、やがて来るキリストの再臨に思いを集めるときです。

主を信じる私たちは待っています。キリストの到来を待っています。それは、日常生活の中で主に出会うことかもしれません。臨終を迎えたその時、主の輝く愛の中に包まれることなのかもしれません。心の中に主キリストを望んで今日ひと日を生きる。これが私たちの歩みなのではないかと思います。

冒頭に二つの聖書個所を掲げました。共にパウロの言葉です。第一テサロニケが書かれたのは紀元50年ごろのことです。当時の教会は、近々主の再臨があると信じていました。そこで、働かない人たちが現れました。世界は終わりを迎え救いが完成するのだから、あくせく働いても仕方がないと思いました。パウロはこの態度を戒めます。主の再臨を信じつつ地道に働くことを命じるのです。

ローマの手紙は、紀元58年ごろに書かれました。パウロはイスパニア伝道を計画しています。これに先立ってローマの教会を訪ね、協力を得たいと考えています。ローマの手紙は、パウロの信仰の自己紹介であり、イスパニア伝道の趣意書とも言えるものです。

主を待ちつつ歩む私たち。聖書が示すところは、理に適ったコツコツとした歩みを続けることです。実際パウロはこれを行いました。信仰と努力、忍耐を尽くして小アジアに伝道しました。そして数々の教会が建ちあがった。地味な日常の歩みの先に、イスパニア伝道のビジョンが形を現したのです。

願いがあり困難があります。聖書の言葉を光とし、信仰を杖として歩みます。つぶやきを祈りに変えて歩みます。このとき知るのです。〝主は、いま私と共におられる〟と。

虚しくは終わりません。信じて生きてきたことは消えないのです。そしてこの日々が繋がって、私たちを救いの明日へ向かわせます。